

令和2年度 第2回 碧南市地域福祉計画策定委員会 会議録

1 日時

令和2年9月9日（水）午前10時から午前11時まで

2 場所

へきなん福祉センター 2階 デイルーム

3 出席者及び欠席者

(1) 出席者（各種団体の代表者）

河原厚司、杉浦邦俊、長谷基宏、古井露子、鈴木たか子、牧野昭彦、對馬幸司、鳥居寛英、立花明德

(2) 欠席者

禰宜田知司、服部千代美、磯貝雅樹、永坂幸子

(3) アドバイザー

日本福祉大学社会福祉学部 野尻紀恵 教授

(4) 事務局職員

ア 碧南市役所

福祉こども部長 杉浦秀司、福祉課長 杉浦浩二、福祉課社会福祉係長 河原睦、社会福祉係主査 沼田京子、社会福祉係主事 杉浦久美子、澤田直也、板倉尚宏

イ 碧南市社会福祉協議会

地域福祉課長兼地域福祉係長 鈴木利男、地域福祉係主査 古川裕隆、小島誠司

4 傍聴者

0人

5 議事

(1) 議題

ア 地域福祉に関する市民アンケートの実施結果について

イ へきなん地域福祉ハッピープランの団体等ヒアリングの実施結果について

ウ へきなん地域福祉ハッピープランの庁内ヒアリングの実施結果について

エ 第3次へきなん地域福祉ハッピープランの計画骨子について

(2) その他

6 議事の要旨

(1) 議題

ア 地域福祉に関する市民アンケートの実施結果について

事務局が会議資料に基づき説明し、その後審議した。

<主な意見・質疑>

【A委員】：13ページ「問6 あなたは、現在、近所の人とどの程度の付き合いをしていますか」で、全体的に「顔を合わせたときにあいさつする程度」が高い数値になってことの捉え方について、都心部では当該項目は低い数値となるかと思うが、碧南市では地域住民のつながりが脈々と続いているため、高い数値となったのでないかと捉えることができる。

17ページ「問8 地域活動をする動機はどのようなことですか」で、1番多い回答は「自分の成長・生きがいとして」、3番目に多い回答が「社会の役に立ちたい」であった。生きがいを感じられるような地域の関係性をつくりあげる、社会活動と生きがいと合致した活動をするなどによって地域活動が活発になる、と分析をすると碧南市の実情に沿うと思う。また、「地域活動」はどのようなことかを考えたときに、調査の項目をみると、「あいさつをする程度」は地域活動に含めていないため、地域活動へのハードルが高くなっているという印象を受ける。地域の人と日々あいさつを交わすだけでも地道な地域活動になるといったことを計画に示し、地域活動の推進が図れると良いと思う。

38ページ「問18 あなたが住んでいる地域には、どのような課題・問題がありますか」では、「特に課題・問題がない」、「わからない」の回答が高かったが、34ページ「問16 あなた、あるいはご家族は現在、日常生活において、主にどのようなことに悩みや不安を感じていますか」では、「特に悩みや不安はない」の回答が低くなっており、日常生活のなかの課題が結構出た結果となっている。自分の生活における課題は感じているが、それが地域の課題であるとは感じていないということが読み取れる。意識があまり浸透していないが「あなた個人の問題を皆の問題にしていましょう」「隣の問題を皆の問題にしていましょう」と考えていくことが地域福祉である。

【B委員】：自分も障害者であるが、一人で行動している際、スーパーなどで手助けをしてもらうことがある。自分から声をかけずとも、ボランティアの活動などではなく、街角で声を掛けてもらい、手助けいただけることがある。全体的

には困っている人に声を掛けてくれてありがたく思うが、特に、中年配の女性から声を掛けていただくことが多く、福祉実践教室などで学生に話をしているせいか、学生からもよく声を掛けていただいている。ボランティアグループなどに参加せずとも手助けを行っている人がいる実態が、調査結果からは漏れているのではと思った。

【C委員】：34ページ「問16あなた、あるいはご家族は現在、日常生活において、主にどのようなことに悩みや不安を感じていますか」では、三分の一が「災害時の備えに関することに」に悩みをもっているとの回答であった。そもそもどこに避難に行けばよいのかよく分からない人もいると思うが、特に今後は感染症対策で避難所の利用形態が変わっていく可能性がある。今一度、見直しを必要とされていると思う。

イ へきなん地域福祉ハッピープランの団体等ヒアリングの実施結果について事務局が会議資料に基づき説明し、その後審議した。

<主な意見・質疑>

特に意見・質疑等なし

ウ へきなん地域福祉ハッピープランの庁内ヒアリングの実施結果について事務局が会議資料に基づき説明し、その後審議した。

<主な意見・質疑>

特に意見・質疑等なし

エ 第3次へきなん地域福祉ハッピープランの計画骨子について事務局が会議資料に基づき説明し、その後審議した。

<主な意見・質疑>

【D委員】：5ページに地域福祉に関する近年の動きが記載されているが、平成30年4月に改正社会福祉法の施行があり、令和元年5月に地域共生社会推進検討会で、「断らない相談支援」「参加支援」「地域づくりに向けた支援」を一体的に行うということが書かれていることは良いと思う。改正社会福祉法でも地域福祉計画にそのことを落とし込むこととされているが、先ほどの市民アンケートの回答でも見られたとおり、個別の課題と地域の課題が解離しているため、ハッピープランでは、この困っている人の個別ケアとして、断らない相談支援、参加支援、地域づくりに向けた支援について、どのように関連性を位置

づけ、相乗効果を上げて地域福祉を推進していくかを示す必要があると考えるが、次期計画においては、どのように見せる予定なのか。例えば3ページには絵が載っているが、このように絵や図があると理解しやすいと思う。

事務局： 見せ方について具体的にはまだ検討中であるが、地域課題や地域活動と個別の課題や支援が全く別物ではなく、関連していることが分かるようにする。また、お互いにリンクさせていくことによって、過ごしやすい地域になり安心につながっていくということを、できるだけ分かりやすいように記載したいと考えている。

【E委員】：7ページでは、碧南市地域福祉計画がそれぞれの個別の上位計画となっている図があるので、どのように碧南市地域福祉計画が個別の計画の上位となっているかが市民目線でも分かるようにできると、障害福祉や介護保険などの支援と地域への支援との相関性が伝わり、市民にとって、地域での課題がもう少し自分事として捉えていくことができるようになると思う。10ページからは碧南市の基礎情報が載っており、18ページ以降に市民意識調査結果・団体調査結果・地域福祉推進会議の結果を書き込んでいくという説明があったが、それぞれの結果はリンクしていると思う。例えば、統計として高齢化が進んでいることやひとり暮らしの人が多いたことがわかり、アンケート調査では自分の課題として、ひとり暮らしで困っている人が多いという結果が出ているとすると、これらの結果は相関にあると言える。市民に伝わるよう見せ方を工夫できると、調査結果が生きてくると思う。また19ページ以降では、PDCAサイクルで評価すると書いてあるので、第2次計画をPDCAサイクルで評価し、次のアクションに向かって第3次計画があると示していくと良いと思う。

【F委員】：自分が民生委員として活動していく中では、民生委員は困り事があった時にどのように行政につなげていくかが大切だと考えている。

以前「生活に困っていて数日何も食べていない人がいる」との通報があり、自宅訪問をした事例がある。その後、その人と生活困窮の対応をしている社会福祉協議会へと同行し、相談した。社協では詳しく話を聞いてくださり、市役所の福祉課につなげてくれた。福祉課の窓口でも丁寧に話を聞いてくれ、支援を受けることができると説明があった。しかし、窓口の人が申請の案内をしても、その人は「申請」という意味を理解しておらず返事に困っていたので、同

行していた自分がその人に「助けてほしいのか」と尋ねたら、その人は「助けてほしい」と言った。その発言をもって福祉課は「申請に相当する」と判断し、すぐに手続きを行ってくれ、生活保護に結びつけることができた。また、長期間食事をしていないとのことであったので、医療扶助を勧め、救急外来に相談に行くことになった。福祉課が市民病院に電話し、碧南市民病院での救急外来の診察のあと、栄養剤を出してもらえたため、生活保護の審査が行われ保護費の支給が決定されるまでの2週間程度しのぐことができた。

地域福祉計画の中には総合相談窓口やワンストップのことが記載されているが、碧南市では、社協と行政が一体的に動いていて、社協に相談したらすぐに行政の生活保護の申請につながっている。これは現実的にはワンストップだと思う。制度なので、申請しないと支援を受けることはできないが、社協のコミュニティソーシャルワーカーと一緒にできれば、現実的にワンストップになっていくと思った。今回の議題に関しても、行政と社協と一緒に計画をつくることは、まさにワンストップを計画を策定することから体現していくことだと思う。相談体制が実際にはワンストップで、総合相談窓口となっていることは碧南市の強みだと思う。国がそれを書けというのなら、机を並べたワンストップではないが、今できているワンストップの相談体制を書いていけばいいのではないかと思う。

もう一つ、地域福祉へのハードルが高いという話があった。以前、新聞で、地域福祉計画は「私たちのまちづくりをどうしていくか」と書いてあるものを見たことがある。地域福祉の具体的な話になると、誰が行動するのかということになるが、碧南市では、例えば、あるお寺で、お寺カフェをやっていたり、お寺の壁にボルタリングの壁をつくり子ども達に遊ばせていたりしているところもある。他にも福祉施設などいろいろな資源が、碧南市には沢山あると思う。地域であまり知られていないかもしれないが実はやれていること、個々の生活の中でそれぞれがやっていることを、行政や社協が掬い上げてつなげ、点を面とすれば、それはひとつの地域福祉の形になり、そんなにハードルが高いことを考えなくても良いと思う。

(3) その他

事務局から口頭にて、次回会議の実施案内について連絡。

(4) アドバイザー（日本福祉大学社会福祉学部 野尻紀恵 教授）による総括

私が言いたかったことを委員の皆様はかなり具体的に発言していただいた。私としても、地域福祉計画の推進も、行政と社協が一緒に受け止めながら、意見交換をしたり活動をしている市町村は他にはないと思う。また、地域福祉推進会議の中で、お寺カフェやヨガなど、様々な立場の人が団体を立ち上げたり、結びついたりしている。

先のご意見にもあったように、ちょっとした日常の手助けは日常茶飯事としてやっている人が多く、また、支援を受けている人であっても、自らもボランティアをし、助け合う関係でいるということが一番大事なことである。

ただ、碧南市はやっていることはすごくても、見せ方が上手ではないのかなと思う。個別でワンストップの相談ができていいるなら、もっと思い切った書き方をしたほうがよいと思った。地域福祉は活動をしている人でも、福祉施設の運営者などであってもとてもわかりにくい。先の方委員からのご意見で、生活困窮の方を生活保護の支援につなげることができたという話は、とても具体的で分かりやすく、良い事例だと感じた。そういったストーリーとして載せることも検討してほしい。本冊子に載せることがはばかれるのであれば、別冊を作り伝えていくこともありだと思ふ。もっと分かりやすく親身に支えていく方法はまだまだあるなと思ふた。

「助けてほしい」という本人の言葉だけで行政が動いていくような市町村は他にはあまりなく、碧南市の良い点だと思ふので、それをどう見せていくのかが大切である。その意味では、庁内のヒアリングを通じてこの5年間でやってきたこと、順調に進んでいることを市民にどう見せていくかが問われる。PDCAサイクルに基づき、ここまでできているから、ここからは第3次計画で積み重ねていくと分かるようにすると、碧南市の面白さがでると思っている。

また、市民アンケートについても、例えば、関心の度合いが高い人ほど、この活動をしてますなど、相関関係を精査していただきたい。単体設問の結果だけではなく、地域のどのような住民にどのように働き掛けたら効果が高そうであるのかを確認して、進めていっていただければと思ふ。